

22019年10月8日、ヴィルジ
ュイフ

プレスコミュニケーション

乳がん

化学療法よりも女性のクオリティ オブ ライフに大きなインパクトをもたらすホルモン療法

本日「*Annals of Oncology*(腫瘍学年報)」上で発表されたコホート **CANTO** の分析は、「乳がんに侵された女性のクオリティ オブ ライフにホルモン療法と化学療法がもたらすインパクト」に関するこれまでの概念を覆す内容を明らかにしています。従来の一般理解に反し、乳がんに高い効果を有するホルモン療法が、とりわけ閉経を迎えた女性に対してより強く長期的なインパクトをもたらしうること、化学療法のマイナス影響は前者に比すとより過渡的であることが明らかにされました。5~10年にわたるホルモン療法が世界的に推奨されている現在、抗ホルモン治療に対して深刻な症状を示す女性に適切な処置を講じ、治療上の漸減を享受しうる女性を特定することが要されます。

乳がんの腫瘍学者であり、ギュスターブ・ルシーの「癌腫学における新治療ターゲットの特定」研究部((Inserm/パリ・シュッド大学/ギュスターブ・ルシー)の研究員でもあるイネス・ヴァズ=ルイス医師のもとで、これらの研究が進められました。

ヴァズ=ルイス医師によれば、「コホート **CANTO** の分析結果によって、抗ホルモン治療が女性のクオリティ オブ ライフに与えるインパクトが、化学治療のものより低いとはいえないことがはじめて明らかにされました。それどころか診断時に観察されるクオリティ オブ ライフの悪化が 2 年後にも存続し、化学療法の影響の方がより過渡的であることが分かりました」。

この研究の枠内において、研究者が診断時、1 年後、そして 2 年後にわたって 4262 名に上る乳がん患者(ステージ 1~3)のクオリティ オブ ライフを測定しました。これらの患者の治療は手術と、それぞれに化学療法と放射線療法が組み合わされています。この治療の後に、約 70%の患者が最低 5 年間のホルモン治療を受けています。研究チームはあらゆるタイプのがん患者に用いられるクオリティ オブ ライフ測定ツール(EORTC QLQ-C30)と、乳がん患者に用いられるクオリティ オブ ライフ測定ツールを連合的に使用しています (QLQ-BR23)。

研究対象とされた患者全般において、診断 2 年後に全体的なクオリティ オブ ライフの悪化が観察されています。この悪化はホルモン療法を受けた患者において多く見られ、なかでも閉経後の患者に目立って観察されました。対する化学療法のインパクトは閉経前の患者に多く、特に認知機能の低下となって表れています。

ヴァズ=ルイス医師は「将来的により適したフォローを行うために、抗ホルモン治療に対して深刻な症状を呈する患者のタイプを予測する必要がある」と述べています。ホルモン療法

には、実際的にホルモン依存性の再発を防ぐ効果が証明されています¹。乳がん患者の 70% にこの再発が観察されています。しかしながらクオリティ オブ ライフの悪化があるとすれば、治療を受けている女性に対する処方遵守にあたってのマイナス影響が考えられます。そこでインパクトの大きな症状に対するフォローが肝要となります。とりわけ閉経に関連する症状、筋肉や骨格の痛み、鬱、極度の疲労感、認知機能の不全に対処し、運動の処方や認知行動療法を取り入れなければなりません。

ヴァズ＝ルイス医師の結論によれば「将来的に、再発のリスクが低い患者ともっとも高い患者を治療にさきがけて識別できるようにならなければいけません。これにより抗ホルモン治療にまつわるエスカレーションを防ぐことができるでしょう。実際に、ホルモン療法は乳がんに対する非常に高い効果を有しています。この治療は再発リスクを約 50% 低減させています。いずれにしても、耐性上の問題からホルモン治療におけるすぐれた効果/リスクの関係性自体が問いただされるわけではありません」。

CANcer TOxicities の略語であるコホート CANTO は、Unicancer に認められ、ギュスターブ・ルシーにおいて乳がんの腫瘍学を専門とするファブリス・アンドレ博士の指導下に置かれています。博士はまたフランス国立保健医学研究所(Inserm)の所長を務め、「癌腫学における治療新ターゲットの特定」研究所の責任者でもあります(Inserm/パリ・シェッド大学/ギュスターブ・ルシー インスティテュート)。このコホートは、フランス各地 26 の施設で治療を受けている 1 万 2000 人の乳がん患者で構成されています。研究のねらいは、治療に関連した毒性を特定し、その影響下に置かれやすい患者層を見分けたうえで、適切な治療を処方して癌後のクオリティ オブ ライフの向上を保証することにあります。

この研究は、国立研究局、スザン G. ヨーメン協会、がん研究のための ARC 財団、Odyssea、ギュスターブ・ルシー財団の支援を受けています。

ソース：

「*Differential impact of endocrine therapy and chemotherapy on quality of life of breast cancer survivors: a prospective patient-reported outcomes analysis* (乳癌生存患者のクオリティ オブ ライフに対する内分泌療法と化学療法のさまざまな影響：予測的な患者報告によるアウトカム分析)」

腫瘍学年報、2019 年 10 月 8 日

<https://doi.org/10.1093/annonc/mdz298>

A. R. Ferreira^{1,2}, A. Di Meglio¹, B. Pistilli³, A. S. Gbenou¹, M. El-Mouhebb¹, S. Dauchy⁴, C. Charles⁴, F. Joly⁵, S. Everhard⁶, M. Lambertini^{7,8}, C. Coutant⁹, P. Cottu¹⁰, F. Lerebours¹¹, T. Petit¹², F. Dalenc¹³, P. Rouanet¹⁴, A. Arnaud¹⁵, A. Martin⁶, J. Berille¹⁶, P. A. Ganz¹⁷, A. H. Partridge¹⁸, S. Delaloge³, S. Michiels^{19,20}, F. Andre¹ & I. Vaz-Luis¹

1 INSERM Unit 981, ギュスターブ・ルシー, 癌キャンパス, フランス ヴィルジュイフ

2 Breast Unit, シャンパリモー クリニカルセンター, シャンパリモー, ポルトガル リスボン

3 Medical Unit 981, ギュスターブ・ルシー, 癌キャンパス, フランス ヴィルジュイフ

4 Department Unit 981, ギュスターブ・ルシー, 癌キャンパス, フランス ヴィルジュイフ

5 Medical Oncology, カーン フランソワ・バクレスセンター, カーン;
6 Unicancer, フランス パリ
7 Department of Medical Oncology, U.O.C.Clinica di Oncologia Medica, IRCCS Ospedale Policlinico San Martino, ジェノバ
8 Department of Internal Medicine and Medical Specialties (DiMI), ジェノバ大学医学部, イタリア ジェノバ
9 Surgical Oncology, ジョルジュ=フランソワ ルクレール センター, ディジョン
10 Medical Oncology, キュリー研究所, パリ
11 Medical Oncology, キュリー 研究所, ルネ・ヒュグナン病院, サンクルー
12 Department of Medicine, ポール・ストラウス 癌センター&ストラスブル大学, ストラスブル
13 Dartment of Medical Oncology, クロディウス・ルゴー インスティテュート, 癌大学インスティテュート - 癌部門, トゥルーズ
14 Surgical Oncology, C.R.L.C ヴァル ドーレル, モンペリエ
15 Radiotherapy Department, アヴィニョン サントカトリーヌ クリニック, アヴィニョン
16 Ministry of Higher Education and Research, 高等教育ならびに研究省, フランス パリ
17 Medical Oncology, ドナルド・レーガン UCLA 医療センター, ロサンゼルス
18 Women's Cancers, ダナ・ファーバー 癌研究所, アメリカ ボストン
19 Service de Biostatistique et d' Epidemiologie, ギュスター・ルシー, パリ シュッド大学, パリ サクレー大学, ヴィルジュイフ
20 CESP, INSERM, U1018 ONCOSTAT, パリ サクレー大学, パリ・シュッド, フランス ヴィルジュイフ

プレスコンタクト

ギュスター・ルシー
クレール・パリゼル - 電話 : 01 42 11 50 59 - 携帯 : 06 17 66 00 26 - claire.parisel@gustaveroussy.fr